

在外研究報告

## 東北大学留学之記

伊 藤 隆 寿

### 一、はじめに

昭和五十九年頃より、在外研究について周囲の勧めがあったが、私自身具体的なことは何も考えていなかった。六十年の春、吉津宜英先生が、ヴァージニア大に出発された。間もなくして、東北大学の中嶋隆蔵先生から、『六朝思想の研究——士大夫と仏教思想——』（平楽寺書店刊）が届いた。何年か前より、私の中国仏教研究の関心は、吉蔵や均正から離れ、羅什前後の仏教に向いていた。演習の授業においても、『肇論』や慧遠の文集を読んでいた。それらの文章を読むにつれ、関心はさらに中国伝統の思考性に進んだ。中国仏教を、中国思想史の上に捉える、というあり方に興味を持ったということであろう。丁度その時期に、中嶋先生の書が届いたのである。その書は、先生の立場と意図とは相違するかも知れないが、私にとっては、以前より描いていた中国仏教研究はかく

ありたい、という願望に対して、一つの具体例を提示して見せてくれたものであった。仏教者による、仏教学という枠に嵌まった中国仏教研究の欠点を補って余りある。しかし、仏教者は他の領域の成果をあまり注意しないのが現状である。仏教を儒・道との交渉の視点より研究する、ということは、多くの場合、仏教者の側からではなく、中国思想、中国哲学の側からなされている。私の身近にあっては、鎌田茂雄先生による仏教と道教との交渉についての研究があるが、それは、仏教者の側からの数少ない例である。私は、多くを先生から学んでいるが、三教交渉の研究は容易でない。しかし、鎌田先生も、随分以前から強調されているように、中国仏教の本質は、仏教者による文献を、仏教のみの立場と観点から扱い研究しても分らないのではないか、と思う。

六十年の初頭から始った曹洞宗教学審議会第二専門部会における「仏教の業論」の研究會において、新たな問題が提起

された。提起というよりは、厳しい批判と言ってよい。それは、昭和六十年四月二十七日に、私は「中国における業報輪廻説と神不滅論」と題して発表したが、このレポートをめぐる議論の中で、テーマとは直接関るものではないけれども、私が従来、吉蔵について研究をしている関係上、吉蔵の空の理解は、正しいのか、という根本的な問いが出された。私は、答えに窮した。これは、吉蔵の空思想に対する評価はもとより、私自身の空に対する理解を問うものでもあった。その後の会合や懇談の席でも、しばしば吉蔵及び僧肇批判がなされた。一言で言えば「本覚思想」だ、と言うのである。<sup>(2)</sup>その正体を明らかにすることが、私に課せられたと言って良い。

夏期休暇前に、六十一年度の国内留学を決意し、行先は東北大学文学部中国哲学研究室、指導教授を中嶋隆蔵先生にお願いすることにした。勿論、この時点では、まだ中嶋先生の了解は得ていない。吉津先生が、遠くヴァージニアから、研修を勧めてくれた。研修課題を「中国における儒道仏三教交渉の研究」として申請した。幸い教授会の承認が得られ、六十一年度駒沢大学在外研究員となった。中嶋先生には、申請が受理された段階で、当方の勝手極まりない申し出にもかかわらず、ご快諾して頂き、その後受け入れの事務手続などについて細心のご配慮を賜った。国立大学における私立大学からの研修受け入れは、私学研修福祉会を経由することになって

いるとかで、その方の手続をすることとなり、六十一年一月に入って私学研修員の申請書を提出した。今、その時の申込書を見ると、研修課題は「六朝仏教思想史研究」となっている。先のテーマと相違していたが、そのことに気がついたのは研修終了後、報告書を作成する段になってのことである。私にとってテーマは左程の意味を持たなかったのである。

## 二、東北大学文学部

四月十七日に、研修開始後初めて登校し、中嶋先生から、事務局・研究室・図書館・生協施設・構内を案内して貰う。ようやく木々も芽吹き始めた頃で、隣接する植物園の池の辺には、水芭蕉が咲いていた。中嶋先生としばし散策、五月末の東北中国学会の予定などを伺う。この日から仙台での研修開始ということになるが、仙台に下宿するか否かで、しばらく迷い、中嶋先生にも余計な心配をかけてしまった。結局、山形の自坊から通学することに落ち着いた。

さて、研修先の大学を紹介することが、これまでの在外研究報告の慣例になっている様子なので、次に東北大学文学部の「昭和六十一年度学生便覧」を参考に、簡単に述べておきたい。

東北大学文学部は、仙台駅から西に延びる青葉通りが、広瀬川を渡り、青葉山に突当たった位置にある。昔の青葉城の二

の丸跡だそうで、昭和四十七年に、法学部・経済学部・教育学部と共に、片平から移転したという。私は、中嶋先生に構内を案内して頂きながら、子供の頃、法学部に在学中であった従兄に連れられて、青葉城趾を訪れたことを想い出していた。その当時、今の文系学部の校舎や図書館が建つ一帯は、米軍の宿舎が建ち並び、芝生が美しく敷かれていた光景が、朧げながら浮ぶ。その頃の建物の一部が植物園の付属施設として保存されていた。のちに、中嶋先生のお宅にお邪魔して知ったのであるが、奥様が、その建物の風景を、美事にキャンパスに描いておられた。

東北大学には、次の一〇学部が置かれている。

- 文学部            教育学部
- 法学部            経済学部
- 理学部            医学部
- 歯学部            薬学部
- 工学部            農学部

別に教養部が置かれ、校舎は、扇坂の道路を隔てて隣接して建っている。文学部には、次のような学科及び専攻が置かれている。

- 文学科——国語学、国文学、中国文学、英文学、英語学、ドイツ文学、フランス文学、言語学
- 哲学科——哲学、倫理学、美学・西洋美術史、宗教学宗教

史、印度学仏教史、中国哲学

社会科学——社会学、行動科学、心理学

史学科——国史、東洋史、西洋史、日本思想史、東洋・日本美術史、考古学

また、大学院は、学部に対応した一〇の研究科が設置され、その内文学研究科には、次の一四の専攻がある。

国文学国語学日本思想史学専攻

英文学英語学言語学専攻

ドイツ文学ドイツ語学専攻

フランス文学フランス語学専攻

哲学専攻

実践哲学専攻

社会学専攻

心理学専攻

美学・美術史学専攻

印度学仏教史学専攻

中国学専攻

国史学専攻

東洋史学専攻

西洋史学専攻

以上が、学部と大学院の学科及び専攻である。さらに、六

十一年度における哲学科の開講講座について、本学部に関係

ある専攻についてみると次のようである。

哲学科宗教学宗教学専攻

宗教学演習（宗教類型論研究）

同 実習（宮城県宗教調査）

宗教学普通講義（比較宗教学史学の動向）

同 特殊講義（日本宗教学史の諸問題）

助教授 華園聰麿

宗教学特殊講義（農耕儀礼の研究）

助教授 杉山晃一

宗教史演習（鎌倉仏教史研究）

講師（非） 早坂 博

宗教学特殊講義（宗教哲学の諸問題）

連続講義 講師（非） 上田閑照

宗教学特殊講義（近代宗教思想史）

連続講義 講師（非） 田丸徳善

印度学仏教史専攻

印度哲学史普通講義（印度哲学史概説）

同 特殊講義（印度哲学史における哲学概説と認識論）

同 演習（サーンクヤ学派と他学派との論争）

同 講読（ラーマーマジャの哲学）

助教授 村上真完

仏教史普通講義（インド仏教史—前期—）

同 演習（部派仏教の成立と背景）

同 講読（アビダルマ研究）

パリー語

教授 塚本啓祥

チベット語

講師（非） 川越英真

印度哲学史特殊講義（古典インドにおける語・意味の考察）

連続講義 講師（非） 服部正明

仏教史特殊講義（インド・カースト論）

連続講義 講師（非） 山崎元一

中国哲学専攻

中国哲学普通講義（中国思想概説）

同 特殊講義（隋唐思想研究）

同 演習Ⅰ（諸子学研究）

助教授 中嶋隆蔵

同 特殊講義（明清思想の研究）

講師（非） 吉田公平

同 講読（毛詩正義の研究）

講師（非） 田中和夫

同 特殊講義（宋代思想の研究）

連続講義 講師（非） 佐藤 仁

同 特殊講義（漢代思想の研究）

連続講義 講師（非） 沢田多喜男

以上が、学部の講座と担当教官である。大学院の講座は、ほぼ学部と共通している。なお印度学仏教史専攻の磯田熙文助教教授は海外留学中の由。

文学部の研究室は、教育学部との共同の研究棟にあり、文科系四学部のメインに位置する。二階に事務室があり、中国学の研究室は六階に配置されている。七階に日本文化研究施設、九階に印度学仏教史の研究室がある。六階の研究室配置上の特色は、中国哲学、中国文学、東洋史の三専攻が、まとめられている点である。これは、東北大学における「支那学」の伝統を踏まえ、文・史・哲三者の交流も緊密である。本学部では望むべくもない体制である。この三専攻に所属する教官及び大学院・学部後期課程の学生でもって、「東北支那学会」が作られている。因みに六十一年度の各専攻の学生数は、次のようである。

中国文学専攻 D 一人・M 七人・学部六人

東洋史専攻 D 六人・M 六人・学部五人

中国哲学専攻 D 三人・M 四人・学部二人

そして、各専攻毎に助手一人が置かれ、私が大変世話になった中哲の助手は、中国思想・科学史専攻の、石田秀実氏であった。今春、九州の八幡大に、専任で転出された由、実力

と柔軟性を持ち合わせた方とお見受けした。また、中嶋先生の演習等で顔を合せた中国哲学専攻の学生諸君は、次の方々であった。（敬称略）

山田史生 D 3 中国中世仏教（華嚴学）

高野淳一 D 1 中国中世仏教思想史（般若思想）

堀 豊 D 1 明末清初の思想（王船山）

小林理恵 M 2 中国古代の心の在り方について

田中正樹 M 1 中国に於ける芸術思想

山田 俊 M 1 唐代の道教

平居高志 M 1 陽明学

榊田浩行 4 近現代中国思想

遠藤直人 3

院生には、研究室に机とイスが与えられていることは、教官との日常的な交流も容易であって、恵まれた環境と言えるよう。先に掲げた中国哲学専攻の開講講座からも知られるごとく、現在、専任の指導教官は、中嶋先生お一人である。その点、中嶋先生のもとに、院生学部生が親密な連係を保って、研究活動においても、各々テーマを異にしつつ、一つのまとまりを見せていた。また先生の指導も行届いており、研究対象をまず自分の力で読み、考えるという基本が、きちんと行なわれていたように思える。

以上が東北大学文学部の概要である。私は、中嶋先生の中

国哲学普通講義と演習Ⅰ、それに先生のお薦めにより、川合康三先生の中国文学特殊講義（中唐文論）に出席することにし、授業以外の時間は、図書館の研究個室を借りて、そこで勉強をするという態勢をとった。

### 三、受講の楽しみ

ところで、文学部の教務掛では、私にも「学生証」を発行してくれた。学内諸施設の利用等において、身分を証するものなので、これは必要である。十何年かぶりで学生に戻ったような気分になり、講義等に出席した。しかも今回研修に来た良かった、と思ったのは、出発前から、私の心のわだかまりになっていた問題——僧肇・吉蔵の仏教思想と中国伝統思想、特に老莊思想との関係、及び自己の立場——と密接に関係するテーマで、中嶋先生が一年間講読をされる、ということとを伺ったときである。「道」をテーマとして、古代から順次文献を取上げる、というのである。私は、中国思想における「道」の考え方を確認する絶好の機会である、と心から喜んだ。勿論私が「道」に興味を持ったについては、多少コメントが必要であろう。先に述べたように、すでに前年から、私が研究対象としている僧肇や吉蔵に対して、痛烈な批判がなされていたことと関係する。その批判は、日本仏教や中国仏教の研究者から出されたものではない。インド・チベット

の仏教思想の研究者からであった。僧肇については、彼の有名な「天地与我同根、万物与我一体」の語は、到底仏教者の言葉ではない、という批判。吉蔵については、「悟」を重視する点。その「悟り」とは、「二理」（体）を悟ること、言語表現を絶した体験であり、従って「教え」（用）は、すべて悟りに至るための方便にすぎない、という考えに対する批判であった。<sup>(3)</sup> 私にとっては、全く寝耳に水の批判であった。しかも、僧肇や吉蔵の、いわば「根源」の思想は、中国の老子の思想と著しい類似がある、との指摘もなされたのである。

中嶋先生の講義内容項目を示すと次のごとくである。ただし、講義は、前年度からの継続のようで、私が拝聴した限りのものであることを承知して頂きたい。

- 一、儒家の道
- 二、諸子の道
- 三、墨家の道
- 四、易の十翼と中庸・楽記に見える道
- 五、儒教成立期の道
- 一、墨家の道
- 二、法家の道
- 三、道家の道
- 四、魏晋玄学における道
- 三、仏家の道

（一、仏典及び仏家の道）

二、禪家の道

四、中唐士大夫の道

五、北宋前期士人の道

六、北宋後期士人の道

七、南宋士人の道

八、明代士人の道

九、乾嘉の学における道

十、洋務・变法論における道

ほぼ右のようなタイトルに従って、各々の「道」が概観された。一年間興味深く拝聴して、中国思想における「道」の普遍的性格を改めて認識させられた。しかも、儒家においては、「現実の具体的な生活の場において道を考え、それを人之道として、そのあり方、実現を説き、個性を否定しなかった。その表現・実現の方法については、人と人との関係性が語られ、一つの規範を定め、それを確認しつつ、道を認識し、言葉で語り、修得していくもの」（講義の一部要約）との指摘がなされたが、他方、特に道家以後、道は、単なる人の道・個別の道を超えた、普遍的・根源的・恒常不変なる道が説かれ強調され、その道は、無名（不可言説）であると考えられた。私には、道家は勿論のこと儒教も仏教も、すべて、この道で貫かれているように思えた。仏家は、究極の道（涅

槃・悟など）を説き、段階的過程的な道を説いて現世からの超越をめざし、道家は、根源の道に復帰して、永遠・不滅の身（神仙）を獲得しようとする。両者共に、すべての手段（言葉など）を離れたところ、忘じたところに、真の道の認識があると説く。認識というよりは、道が姿をあらわすのである。このように説かれる仏家と道家とは本質的な相違はないように思われる。むしろ同質ではないか。あるいは、仏家は、故意か無意識にか同質をめざしたのであろうか。しかし、これは先の批判によれば仏教本来の立場からは甚だ逸脱する。そして儒家（孔子以後どこまで限定すべきか今の私には判断出来ないが）と仏・道家とは対峙することも確認された。

次に演習は、漢初の陸賈の『新語』の読解であった。やはり前年度からの継続で、「慎微第六」から始まった。院生及び学部生十名程が出席し、当番を決めて校訂・訳・注の予習をしていくというスタイルである。私は、全くの「お客」として同席させて貰った。テキストは、儒家の立場からの政治論とされるものの、道家説を導入して折中的で、漢代の融合的風潮の端とされる。私には説かれていることの意味は、少しも分からなかったが、融合的性格のところに興味を覚えた。学生諸君にとっては、目障りな門外漢であったことと思う。

また、もう一科目、聴講させて頂いた「中国文学」は、白居

易の作品を読みながらの講義であった。川合康三先生は、京大出身で、東北大に來られて五年程という若手のホープである。中国の詩学を研究テーマとされ、昨年、中国の英傑『曹操』（集英社）を出版された。御論文「中国のアルバ」（東北大学文学部研究年報三十五号、一九八六、三月）などを拝見すると、実にロマンチストの一面が感じられる。講義は、白居易が元和十年（八一五）に江州司馬となって九江に趣き、翌年廬山香炉峯下、遺愛寺に近く草堂を結んだときの作品から始まった。白居易の行動とその時々作品を読むという形で進められた。私は、「閑適」の境に特に引かれた。白居易はのち杭州刺史となるが、私は、かつて廬山や杭州を訪問した時の情景などを思い起しながら、大変楽しく興味深く拝聴した。

ところで、授業の合間に利用した図書館であるが、組織としては、本館・分館・部局図書室に分れている。本館は、文系四学部に移転に伴って、昭和四十七年に建てられ、四十八年十一月に全面開館した。総面積一二四八〇m<sup>2</sup>、地上二階地下二階建。閲覧室三、席数九〇五、研究個室八。蔵書数約一四六万四千冊（文系四学部と教養部の集書を主体、その内開架約八万冊）。特殊文庫として、狩野文庫（狩野亨吉旧蔵書）を始め、榎田、漱石、ヴンド、ケーベル、シュタイン、ゼッケル、チーテルマンの各文庫やチベット大蔵経などがある。

狩野文庫には貴重書が多く含まれるが、五月二十六日から一週間、その中の漢籍古版本を中心とする善本二十一点が展観された。仏書としては、唐復礼『十門辨惑論』の開元寺版、『壇經』の鎌倉時代写本（金山寺本）、『景德伝灯録』の貞和四年建仁寺天潤庵刊本があった。書庫にも自由に出入させて貰ったが、図書の検索には苦勞した。それは、目録が二種（昭和四十七年以前と以降）と分類が三種（昭和四十八年以降の新分類表・旧片平本館分類表・旧教養部分館分類表）併用されていることと、新分類表による配架が、分類大綱毎の受入順となっていたためである。

#### 四、主な出来事

四月二十六日に東北支那学会の例会が開かれ、招かれて出席した。この会は、学内組織で、文学部の中国文学・東洋史・中国哲学の教官・学生と教養部の中国学を専攻する教官とで組織されているようだ。会長は、東洋史の寺田隆信教授。この日は研究発表と共に、新入生（教養部から専門部へ）歓迎会を兼ねていた。発表は、中嶋先生が「雲笈七籤の諸本について」と題して話された（この時の内容が、十一月三十日発行の『集刊東洋学』五十六号に掲載された）。新入生歓迎会に移り、会長挨拶、自己紹介、懇談と続いた。その際、「支那学」について一頻り。特に新入生諸君と私に対し



て、今の「中国学」という概念では収まらないのだ、ということが説明された。先の『集刊東洋学』は、中国文史哲研究会の会誌であるが、また東北中国学会の会員にも配布されている。

五月三十一日と六月一日の両日、東北大学を会場に、東北中国学会が開催され、私も参加した。東北・北海道の国・公立大を中心とした学会で、現在は、東方学会と連携が取られている。三十一日は午後一時から研究発表が行なわれ、午後二時から公開講演があつた。花園大学の入矢義高教授による「中国口語史の構想」と題するものであつた。終了後、参加者全員バスに乗り、郊外の保養施設茂庭荘に移動。午後六時より大広間で懇親会。約百名の出席。私にとっては東北大学の何人かの人達を除いて、全く面識のない方々ばかりであつたが、思いがけず中村璋八先生が出席されたのには驚いた、と同時に安堵する思いであつた。地酒の大樽も割られて益々懇親の実も上がった。宿泊の同室に、宮城教育大学の高橋孝助先生（近現代史）と御一緒し、随分遅くまで話し込んだ。そして翌六月一日は、茂庭荘の会議室を会場に、二つの分科会に分れて午前中研究発表がなされた。このような形式の学会は、私にとって初めての体験だったので、感心やら感激やら、アットホームな雰囲気が大変良かった。ところで、研究発表（二日間で十七名）の中で、仏教に關係する発表は、次

の二つであつた。

鳩摩羅什漢訳仏典の口語について

奈良女子大学 松尾良樹

中仮の論理——吉蔵教学の基調をなすもの——

東北大学院 高野淳一

前者は、敦煌資料（変文）を出発点として、文語文献の中から口語資料を蒐集するという作業の過程で、羅什訳の仏典に見られる口語表現についての発表であつた。特に「見」の用例について検討し、従来は受身の読み方（見られ等）が行なわれているが、実は口語表現であり、尊敬の意味の助動詞である、と言う。後者は、プログラムに付された発表要旨の言葉を借りれば、「吉蔵はその膨大な量にのぼる著作の至る所で、中仮の論理を駆使して、論述を展開している。この中仮の論理自体、吉蔵の教学全体の中でどのような問題意識に端を発して、どのように展開し、吉蔵の教学全体の中でどのような意義をもっていたかについては、従来必ずしも十全な分析が加えられて来ているわけではない」との問題意識で、発表がなされた。この時は、『大乘玄論』を主材料とするものではあつたが、その基本構造を、よくまとめたいと思う。この発表内容は、その後再検討され、一段と内容が深められて、近刊の『集刊東洋学』五十七号（一九八七年五月三十日刊）に「中国中世における真理観の側面——吉蔵二諦論と

中仮の論理——」と題して収録されたので参照していただきたい。

十一月八日の第九十三回中哲読書会において「三論学派に関する諸問題」と題して発表。従来の研究を概観した上で、文献上の問題として『大乘玄論』の真偽問題を要約し、思想上の問題として、一面「吉蔵の三論教学の基盤が、僧肇の思想を継承し、それを一層明確化させることによって築かれている」一点に注意し、吉蔵が僧肇を引用する一二の例文を示し、そこにおける吉蔵の意図と、引用された僧肇の文章の意味をさぐりながら、吉蔵と僧肇との同質性に言及した。また、そのことは、僧肇の思想の理解如何によっては、老荘思想との類同性に連なることも指摘した。つまり、恒常的・根源的な「一道」(理)の思想が、根底にある、ということである。因みに、十二月初旬、仏教学部論集第十七号を手にした。私には、先に述べたように、研修に出る前から幾つかのわだかまりがあった。すなわち、袴谷氏の「悟」「真理は一つ」「真理不可言」に対する批判の意味や氏が「無常」と言うのはどのような意味なのか。また松本氏の「如来蔵思想は仏教にあらず」(六月の印仏研発表、印度学仏教学研究第三十五巻第一号、昭和六十一年十二月掲載)の主張に対する懐疑である。論集に掲載された両氏の論評は、これらの疑問を、ほぼ解消させてくれるものであった。

ところで松本氏は、右の論評の注記(11)において、「如来蔵思想と老子の哲学との間には、著るしい類似がある」と鋭く指摘されたが、類似というよりも、全く一致する、と言うべきだ。如来蔵は、*tathāgata-garbhā*、つまり女性原理に基づく哲学だ、と言われる。それに対して、彼も承知しているのだが、老子の「道」は、「万物の母」「天下の母」とされ、老子第六章には、

谷神は死せず、是を玄牝という。玄牝の門、これを天地の根という。綿々として存するが若く、これを用いて勤れず。

とある。谷神も玄牝も、女性の象徴である。つまり老子の道も女性原理に基づくものだ。

吉蔵に対する批判を、自己の問題と受止めていた私にとって、この時期に駒沢を離れたことは、そのことを冷静に考える時間が与えられることにもなった。松本氏の場合、インド仏教学のみならず、中国・日本の仏教、中国思想・哲学など周辺の人々をも考慮した場合、私は批判のみではいけない、と考えていた。三論学では破邪即顯正と言うけれども、つまり正しい仏教の提示がなければ何の意味もない。その点、松本氏が論評の中で、「縁起」「法」の解釈を示したことは評価したい。しかし、すべて疑問が解消したわけではない。「無我」「空」「中道」について、「戲論」について、どのような新

たな解釈を与えるのか。彼は現在ウイーンに在る。帰国後、順次明確なる答えを出して下さることを期待したい。

十二月十七日、中哲の忘年会。当日早速二つの論評をコピーして中嶋先生に差し上げた。従来の仏教理解に対する根本的な批判がなされていることを知って貰いたい、との考えからであった。しかし、東北大の中国学は、京大系とのこと、袴谷氏の論評は、タイトルからしても不快感を与えたかも知れず、松本氏の論評に対しても、クールな受止め方であったように思う。私の気持が充分伝わらなかったことは残念であった。助手の石田氏が、両論文を丁寧に読んでくれたようで、一月に入って感想を述べてくれた。この日は、丁度連続講義の最終日で、講師の広島大学、佐藤 仁教授（宋代思想）の慰労も兼ねていた。教養部の吉田公平、市来津由彦両助教授、非常勤の宮城学院女子大学の田中和夫助教授も出席され、実に楽しい忘年会であった。この夜は、中嶋先生宅にお世話になる。

翌六十二年一月は、第二、第三週の二回授業があつて、一月二十八日で終了となった。三月一日、中嶋先生宅へ、家内と共に伺ひし、奥様の心尽しのお料理で、送別会を催して頂いた。

## 五、おわりに

六十二年五月二十五日の仏教学会定例研究会における、私の国内研修報告が終つてから、この報告書作成に関し、留学の成果は何もなく、その跡形を残したくない、などと不届な言葉を吐いた。しかし、留学が、学内の先生方、及び東北大の先生方の犠牲によって成り立ったことを考えれば、この報告を書くことは最少限の義務である。ただ、所詮この種の報告の意義は、新たな情報提供などにおいて大変有意義な一面もあるが、大方は、当人のみにある。最初から最後まで読んでくれる方が何人あるう。などと思いつつも、以上拙ない文章で報告に及んだことをお許し頂きたい。本末転倒であるが、最後に、一年間の国内留学をお認め下さった仏教学部の諸先生方、指導教授を快諾して下さい、公私にわたる細心のご配慮とご指導を賜りました、中嶋隆藏先生、門外漢の私に聴講をお許し下さった、川合康三先生、さらに東北大学でお世話になった諸先生、事務部局と図書館員の方々、及び中哲研究室の石田秀実氏、山田史生・高野淳一氏をはじめとする学生諸君に対し、衷心より深甚なる感謝を捧げます。

（昭和六十二年七月二十日記）

（1）この発表を基に、のち「梁武帝『神明成仏義』の考察―神不滅論から起信論への一視点―」として駒大仏教学部研究紀要第四十四号、昭和六十一年三月に掲載。

(2) この問題提起の伏線は、三月十三日発表の松本史朗氏「如来蔵・人権思想と宗教的世界観―我論 (egoism 自己維持) と無我論 (自己否定) ―」にあった。また「本覚思想」は、袴谷憲昭氏の用例に従うもので、袴谷氏「差別事象を生み出した思想的背景に関する私見」(駒大仏教学部研究紀要第四十四号、昭和六十一年三月) 参照。

(3) 「悟」「一理」等に対する批判は、袴谷憲昭「宣長の両部神道批判―思想と言語の問題に関連して―」(仏教学第二〇号、一九八六年十月) 及び松本史朗「縁起について―私の如来蔵思想批判―」(駒大仏教学部論集第十七号、昭和六十一年十月) 参照。ただし、これらの論文が刊行される以前から、筆者の周囲において議論が囂しかったのである。

(4) 前注の松本史朗氏論文(タイトルの頭に論評と付さる)と袴谷憲昭「京都学派批判」。